

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 28 日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2010～2014

課題番号：22320038

研究課題名(和文) 沖縄の服飾および染織技術の非破壊的分析のデータ構築

研究課題名(英文) The Database Construction of the non-destructive analysis of Costumes and Textiles in Okinawa

研究代表者

片岡 淳 (KATAOKA, JUN)

琉球大学・教育学部・名誉教授

研究者番号：30204415

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究対象地域を琉球文化圏とし、奄美大島宇検村・久米島・沖江良部島・沖縄本島當銘正幸所蔵品を中心に調査・資料分析を行なった。明治・大正・昭和に至る衣の変遷(琉縫い・和服化・洋装化)がわかった。紅型・花織の歴史、沖縄独特の刺繍技術、うるま市伊波に残る腰機の類型が奄美大島大和村の「うれぐし」を発見出来た。最も古いとされた鎌倉芳太郎の紅型の調査ができ、平織絹で、胴衣の形式から沖縄産でないことがわかった。刺繍についても尚家国宝を併せて6領確認できた。本部町嘉津宇に遺る刺繍衣装は15世紀に遡ることがわかった。沖縄のヤシラミ織、ヤシラミ花織、目玉柄の経緯緋は邪気払い、災いを除けるためであることがわかった。

研究成果の概要(英文)：On this project we have researched from Amami-islands to Okinawa mainland, the collection of Uken, collected by the board of education, Kume-island, Okinoerabu-island. These were made almost 150 years old, especially 15 century, there remains the original embroidery costume in Uken, Motobu, Okinawa. I found the same style back strap loom "Uregushi" like the loom on Iha, Uruma. Dis-continous supplementary weave, Hanaori, in center of Okinawa-islands, banana fiber Ikat technique. We can confirm oldest Bingata cloth is the silk fiver from Kyoto. White yarn, dark blue or black grandrelle yarn, Yashirami and Chirinchi were considered to be effective in warding away evil spirits. The system of mourning dress in Okinawa is recorded in Fukusei.

研究分野：芸術諸学

キーワード：沖縄 染織 模様 緋 紅型 染料 刺繍 衣装

## 1. 研究開始当初の背景

これまで沖縄の染織品は、紅型、緋、首里花織など首里を中心とする王朝文化としての染織がよく知られてきた。伊波普猷、鎌倉芳太郎らが大正・昭和初期に調査発表した意義は大きい。しかし、庶民あるいは、刺繍・離島の神衣裳についてはほとんど調査研究されてこなかった。辻合喜代太郎・橋本澄子共著の『琉球服装の研究』ではその形態に注目し、素材や染織技法については詳しく調査されていない。民芸の柳宗悦が民衆工芸として沖縄の染織に注目したが、やはり本土の研究者が沖縄に滞在しての研究には限界があった。田中俊雄・俊子氏が『沖縄織物の研究』を出版したが、先の大戦前までは、泊、小禄、糸満そして南風原が盛んに生産されていた紺緋や駒上布など主な生産地や特徴的な柄などはほとんど報告されていない。型紙を使って染色する紅型のうち、藍色が主な型染めを「藍型」というが、1609年の島津侵攻を境に那覇の町人の間に広まったといわれるが、その経緯や変遷は文献調査にとどまる。紺屋諸家と首里大奥の仕事である御内原御内証御用との関係はどのような状況であったのか。このような現状を感じていた時に、豊見城市に在住の當銘正幸氏が私財を投じて漆器や陶器、そして機道具などの民具1万点余りを集めていたことを知り、調査を始めていた。しかし膨大な資料はほとんど本人しか分からなかった。明治・大正・昭和の庶民の生活の衣裳は1000点以上もあるので、柄の傾向や産地の特徴など資料の撮影と計測等調査カードを作成することが責務であった。長年沖縄の服飾を研究してこられた研究協力者の植木ちか子氏には、奄美大島を含めた貴重な資料の所在や所蔵者や機関との連絡を惜しみなく提供して頂くことができた。また、寺田貴子氏には刺繍について、また国内外の研究者の紹介をしていただき、名古屋大学の中村俊夫年代測定総合研究センター長の協力をいただくよう二人に尽力いただいていた。

使われた染料の分析について、「雌黄(しおう)や臙脂綿(ラックカイガラムシ)についての分析結果が一点もなく、沖縄の地で光の影響を同じくするところでの分析データの蓄積を始めなければならないと思っていた。

奄美諸島・大島はかつて琉球王朝文化圏であったため、琉球船が碇泊した沖江良部島・宇検村に遺る染織品調査を行なう必要があった。平成10～12年に沖縄県教育委員会の染織品調査に同行した折、限られた時間での調査のため、一部の染織資料調査のみ行なわれたので、早急に追加調査をする必要があった。

## 2. 研究の目的

- (1) 琉球文化圏に遺る染織品調査を行なうことで明治・大正・昭和の衣生活についてのデータを集め、整理・考察する。
- (2) 沖縄・奄美諸島各地に遺る染織品の調査の、脆化した染織品のデジタル撮影資料を集積することで、今後の研究の基礎データ作りをする。
- (3) 色測計により、より客観的なデータの蓄積

をすること。琉球大学機器分析センターに依頼する。

## 3. 研究の方法

琉球文化圏に遺る染織品調査を実施した。主な調査地と調査機関は以下の通りである。調査はいずれも片岡・植木・寺田がおこなった。

### (1) 調査機関・調査者等

- ① 那覇市歴史博物館所蔵刺繍衣装(国宝)調査
- ② 久米島博物館蔵染織品調査
- ③ 奄美大島の宇検村および大和村教育委員会所蔵染織品衣装調査
- ④ 奄美博物館所蔵衣装調査(2014.11.17-21 実施)
- ⑤ 瀬戸内町資料館所蔵染織品およびガラス玉調査
- ⑥ 當銘正幸所蔵染織品調査(2010.4～2015.3)

(2) 脆化した資料をより鮮明で、繊維の計測が行なわれる撮影をするため、収集した。

## 4. 研究成果

(1) 琉球文化圏に遺る刺繍衣裳は以下の7領であることがわかった。

- ① 奄美大島大和村胴衣
- ② 沖江良部島森家衣裳
- ③ 伊平屋島あながし衣裳
- ④ 本部町嘉津宇仲村家衣裳
- ⑤ 久米島あしあげこむね衣裳
- ⑥ 久米島博物館衣裳
- ⑦ 那覇市歴史博物館尚泰王衣裳(国宝)

いずれも琉球独特の「琉球千鳥縫い」であることを研究協力者の寺田貴子氏は結論付けた。⑦は明治時代の現代であるが、その他はいずれも中世、15世紀の資料であることが分析でわかった。④の仲村家の絹地段締緋に総刺繍大袖衣と御巾、②沖江良部島森家大袖衣、伊是名島名嘉家紅大袖衣の4件を名古屋大学年代測定総合研究センター長中村俊夫教授の協力により、加速器物量分析(AMS)装置を用いて、放射性炭素(<sup>14</sup>C)年代測定を行なった結果、1426～1500年代に遡ることがわかった。

1458年尚泰久王が鑄造をさせ、首里城に揚げていた。千代金丸、治金丸、北谷菜切の三振りの宝剣もいずれも15世紀の作と推定されている。琉球八社の制や多くの寺を建立した。源為朝伝説と三山統一の琉球王国の成立期が重なり工芸技術の本土からの移入を今後詳しく調査研究していきたい。

④と⑥については太陽または向日葵模様のようなおおらかな模様が確認でき、制作年代が近いことがわかった。⑥の資料は今回初めて調査公表することができた。この模様はタジキスタンのソグド州やウズベキスタンのサマルカンド近郊のジザックでつくられる太陽(天空)文を連想し、吉祥祝福を纏うようだ。今後、資料をさらに調査し、刺繍に描かれた世界観についても考究したい。

明治・大正・昭和の庶民の衣裳についてこの他の調査は、豊見城市在住個人宅にて明治・大正・昭和戦前の庶民の衣裳調査(主に花織、芭蕉、苧麻、木綿等)約500点余りを調査した。聴き取

りのよると、泊は女物の大柄の緋を織っていた。絹の壁上布、駒上布など(現在は南風原で生産されているもの)が確認された。垣花は市松柄が特徴であった。糸満は農作業用の反物を織っていた。現在は南風原紺緋が有名であるが、戦前は那覇・糸満・南風原各地で生産されていた。

沖縄の魔除けの緋柄、ヤシラミと言われる織柄を、首里では極薄い水色地に目玉模様の経緯緋衣装が葬礼の装いであったことがわかった。また、那覇ではチリンチーと言われる一本使いの経緯もやはり喪服の類だということがわかった。沖縄本島北部の山原では、芭蕉地に白木綿糸の細経緯が喪服であった。明治12年に沖縄県になってから、近代化が進められた沖縄も、戦後黒に変わった。當銘氏から、忌み嫌う喪服の収集はたいへんな苦労があったと聴くが、皇民化が進む中、戦後まで那覇、首里の人々は伝統的な衣装を大切に守っていたことが明らかになった。ヤシラミ、チリンチーや目玉模様の衣装は死装束ではなく、邪気から身を守る喪服や厄除け、元気がないときに着用する衣装であることがわかった。首里の緋織物に空糸が使われるが、白赤の空糸は晴れ着に、白紺空糸は凶事等に使われた。これらは、凶事のみに着用するだけでなく、気が晴れない時の着用もされ、また、嫁が実家に帰り、夜遅く帰る場合は、邪気払いにヤシラミ柄の着物を頭から覆って帰したという聴き取りができた。ウズベキスタンの産着にも白紺空糸が使われる。フィリピンルソン島イトウネグ族 (Itneg) の白赤紺色木綿織物オウエス (owes) も戦闘衣から祝祭時の盛装用としていた。一方目玉模様は、中央アジアのバクトリアを起源とする目玉模様の貴石やガラス玉であることを考察した。緋模様の名称を含めて来歴を今後追う課題も見えた。これらの成果の一部は、沖縄の工芸産業に貢献を期待して、沖縄県立博物館・美術館にて「沖縄コンテンツ」展で発表した。今後、中央アジアの文化圏からみた文化比較研究を行ないたい。

芭蕉布は首里のニーガシ芭蕉や黒朝衣に代表されるが、中部地域にも格子に経緯緋の芭蕉布があり、王府時代の影響が残る明治時代は緋が芭蕉糸だったものが、次第に木綿糸に代わり、ついには全て木綿糸の衣装に変わり、形態も琉縫いから和服、さらに洋装に変わる衣の変遷を確認することが出来た。

大和文華館所蔵紅型衣装 6 領はこれまで、同館で公表する以外調査されて来なかった。王子着用かと思われる衣装 1 は『沖縄美術全集』に掲載されているのみである。その他、田無といわれる女性用夏衣装、踊り衣装など用途に加えて、使用類似型紙が 4 領見つかり、合計 6 領確認できた。1609 年の島津侵攻以後、首里王府の紅型以外に、那覇型といわれる紅型(藍型)が生まれたといわれている。このことについて、色差しの仕方や、沖縄に所蔵されている首里系の型紙にはない模様の衣装が確認できた。今後

類似資料を集めて、その特徴を検討する課題がみつかった。また、左右対称の意匠は御内原といわれるところで着用する王・王妃クラスの着用資料ではないかということがわかった。唐草牡丹模様の衣装については、金沢美術工芸大学附属研究所、沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館、沖縄県立博物館・美術館、東京国立博物館、松坂屋コレクションなど型紙と染織資料について比較検討した。

金沢美術工芸大学に鎌倉芳太郎氏よって昭和 32 年に寄贈された琉球紅型型紙 102 枚の調査を行なった。この紅型型紙は同氏が、1921、1924、1926 年等の沖縄調査の第 2 回目 1924.5 月から 5 ヶ月間滞在時に城間・知念・沢岬家の紅型型紙を収集したものの一部である。型紙のタイトル、銘、型紙の外寸、内寸、当て目、貫目の有無等調査し、伊勢型紙との類似性についての比較資料を作成した。また、型紙から染められた紅型資料の比較を行なった。型紙の外寸と模様彫られた内寸と美濃紙との関係は、企画の寸法に「紙裁ち」をするため必ずしも有効な検討でないことがわかった。

本資料に加えて、沖縄に遺る型紙の制作年月日一覧表(102 枚)を作成した。「1797(嘉慶 2)年当蔵知念にや」とあり、紅型御三家の知念家の型紙が最も古い。また、最も新しい銘がある型紙は 1992(大正 11)年とある。友寄という銘がかなりあり、御三家以外の紅型型紙宗家についても課題が残った。

奄美大島の宇検村教育委員会衣装調査を行ない(2014.11.17-21)、紅型衣装胴衣、裙、大袖衣、帯等撮影と計測した。胴衣は、脇明きのところに細紐をつけるのが、沖縄諸島とは異なっていた。また袖口、衿、脇明けに三角の二目落としを施している。現地調査をすると「神屋」といわれる建物の入り口はコンクリートで塞がれているため、中にある衣装は湿気や害虫により劣化が激しいため、教育委員会に帰宅して大切に保存されることを望む。

奄美博物館衣装調査(2014.11.15 -16)を行なった。現在は同館に所蔵されているが、採集地は宇検村であった。絹胴衣や神衣裳など調査した。

大和村では腰機の構造の特徴である高機の先行構造の機と織物「うれぐし」と言われる伝承者と資料を確認できた。これまでは奄美女性史に白黒写真が掲載されていただけであった。大島紬を織る箆を半分ほど用意し、中筒、糸綜紐をつけた腰機である。織り出される模様は、白黒の交互に整経された糸をすくって紋様を織り出す。沖縄本島中部うるま市伊波の「伊波メンスー」が類似の織物である。高機の準備段階として「織りあそび」といわれる民俗事例であろうか。もちろん、織られた帯は着物の帯としての用途のために作られる。腰回りの二倍の長さに織られ、両端の経糸は紐編みされ、前で固結びをする。

瀬戸内町立図書館・郷土館所蔵「敷物2枚西洋織物」は織物ではなく、毛氈であった。正倉院御物の毛氈以来、これまでの歴史を埋める貴重な資料であることがわかった。平田素子氏が『長崎唐人貿易にみる毛氈に関する研究「唐船輸出入品数量一覧 1637～1833年 復元 唐船貨物改帳・帰帆荷物買渡帳 毛氈製造毛氈製造手続 并道具繪圖」を通して』のなかに捺染毛氈・花模様毛氈など報告している。装飾方法として型押し、つまり木版によるインド鬼更紗の技法によるものではないか。表面は染まっているが、裏側は白くヘアの多い羊毛である。同館所蔵ではないが、毛氈の敷物に九路盤と十九路盤が描かれた囲碁の基盤の代用としたものがある。このほかに琉球文化圏に多くみられる神女の玉ハベラという魔除けのビーズ細工の成分分析を行なうことができた。分析資料不足で生産地は特定することができなかったが、沖縄県立博物館・美術館、那覇市歴史博物館、浦添美術館、伊是名島ふれあい民俗館などに所蔵されている御玉貫(うたますき)といわれる祭祀用の錫製の酒器の周りに四つ編み、六つ編みなどで被せたものをいい、同館資料の分析からいずれも鉛ガラスではなかった。なお分析は琉球大学機器分析センターの蛍光X線分析装置で行なった。

(2) 琉球大学機器分析センターにて染織品のデジタル撮影を行なった。使用機種はデジタルマイクロスコープ VHX-1000(株式会社キーエンス)である。繊維製品のデジタル撮影資料と計測データを構築した。織り組織、繊維、染料分析については、標準となる染料染色方法の検討と、永年経過による退色をいかに時間差のある資料分析に役立てるか今後の検討課題も見つかった。鎌倉芳太郎が『琉球文化の遺宝』のなかで紅型の最も古いとされている「絹緑地菊襷模様胴衣」について、まず袖の形態が他の芭蕉や袖の胴衣とことなる広袖であり、その他は全て筒袖であった。仕立ては単衣である。素材は生糸の平織で、地色の藍色料が摺り込み法である点、染めの際を重んじる紅型とは異なる見解に至った。緞子やその他の紋織物の織り密度や使用された糸の直径など本デジタル撮影資料をもとに計測を継続していく必要を感じた。今後、これらのデジタル撮影資料をもとに再検討し、活用されることを願う。

(3) 紅型に使われた色の計測を行なったが、色料そのものの標本、木綿・絹に染めた標本と永年経過し退色した標本と分析を行なった。今後どのように同定するか課題が残った。

紅型の色数を調査したことで、首里城の御内原で着用されたであろうと思われる紅型と薩摩侵攻以後、那覇型といわれる紅型(藍地型)について、色数や染め技法の丁寧さなど違いが明らかとなった。芭蕉や木綿の赤色染めに朱(辰砂)で染めた資料を確認できた。茜、蘇芳、紅花については継続して標本作製していきたい。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 6 件)

(1) 片岡 淳・植木ちか子・金城睦弘「沖縄に残すべき明治・大正・昭和の服飾品および染織品 當舖正幸コレクション調査報告 1」平成22(2010)年3月 琉球大学教育学部紀要 第76集 pp95-117 (備考: 校正中であったため、年度を過ぎたが、調査資料を追加掲載した。)

(2) 片岡 淳・植木ちか子・寺田貴子「沖縄の服飾および染織技術 研究成果中間報告書」平成23(2011)年4月 琉球大学50周年記念会館 報告会

(3) 中村俊夫 植木ちか子・寺田貴子・祝嶺恭子・片岡 淳「沖縄の服飾および染織技術 研究成果中間報告書」基調講演 中村俊夫 平成24年12月24日 沖縄県立博物館・美術館 シンポジウム

(4) 片岡淳「大和文華館紅型型紙調査報告」平成26(2014)年4月17日実施 調査報告書

(5) 片岡淳「金沢美術工芸大学美術工芸研究所所蔵紅型型紙について」

平成26(2014)年5月29-30日実施 調査報告書

(6) 片岡淳 平成26年度工芸コンテンツ産業活用促進事業報告書 沖縄県工芸産業協働センター

[ホームページ等]

<http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp:8080/bitstream/123456789/16510/1/No76p095.pdf#search=>沖縄に残すべき明治・大正・昭和の服飾品'

[学会発表] (計 1 件)

(1) 片岡 淳「Women's Mourning Dress in Early Modern Okinawa」第26回国際服飾学術会議ポスター発表 優秀賞受賞 査読有 平成26(2014)年8月20-21日 学習院女子大学

[展覧会発表] (計 1 件)

(1) 片岡 淳・植木ちか子・寺田貴子「沖縄庶民の装い - 明治・大正・昭和の衣の変遷 -」展覧会資料 平成22(2010)年5月22日～6月6日 浦添市美術館

[図書] (計 1 件)

(1) 片岡 淳・植木ちか子・寺田貴子『琉球・沖縄の衣生活概観 - 遺品の実態調査からみえてきたこと -』p159

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

片岡 淳 ( KATAOKA Jun ) 琉球大学・名誉教授

研究者番号: 30204415

以上